

St. Luke's International University Repository

Experience of Graduates and Their Views about the Graduate School for the Future: St. Luke's College of Nursing Graduate School 1980～2000

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 及川, 郁子, 横山, 美樹, 伊藤, 和弘, 白木, 和夫, 堀内, 成子, 射場, 典子, 有森, 直子, 鈴木, 里利 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/453

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

大学院修了生の動向
—聖路加看護大学大学院1980～2000—
(大学院将来構想プロジェクト)

小澤 道子¹⁾ 及川 郁子²⁾ 横山 美樹¹⁾
伊藤 和弘³⁾ 白木 和夫⁴⁾ 堀内 成子⁵⁾
射場 典子⁶⁾ 有森 直子⁵⁾ 鈴木 里利²⁾

Experience of Graduates and Their Views
about the Graduate School for the Future :
St. Luke's College of Nursing Graduate School 1980～2000
(Graduate School Future Project)

Michiko OZAWA, R.N.¹⁾, Ikuko OIKAWA, R.N., M.N.²⁾,
Miki YOKOYAMA, R.N., M.N.¹⁾, Kazuhiro ITO, M.Ed.³⁾,
Kazuo SIRAKI, M.D.N., Ph.D.⁴⁾, Sigeko HORIUCHI, R.N., D.N.Sc.⁵⁾,
Noriko IBA, R.N., M.N.⁶⁾, Naoko ARIMORI, R.N., M.N.⁵⁾,
Satori SUZUKI, R.N., M.N.²⁾,

〔Abstract〕

St. Luke's College of Nursing Graduate School has celebrated its 20th anniversary. The objective of this study was describe characteristics of the graduates of the first 20 years and learn their ideas about graduate education in order to take them into consideration in our discussions of the future orientation and policies of the Graduate School. In July 2001 we mailed questionnaires to the 299 graduates (278 master's graduates and 21 doctoral graduates). Slightly more than one-third provided data for our study.

The findings refer to both groups, with some detail presented for master and doctoral graduates separately.

- ・ Of the graduates, 80% entered graduate school as private persons and 20% were taking official leave from their employers or receiving other support from them.
- ・ Motivations for entering graduate school included: improvement of research ability,

1) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
2) 聖路加看護大学 小児看護学 St. Luke's College of Nursing, child Nursing
3) 聖路加看護大学 社会学 St. Luke's College of Nursing, Sociology
4) 聖路加看護大学 教授(大学院) St. Luke's College of Nursing, The Graduate School
5) 聖路加看護大学 母性看護学 St. Luke's College of Nursing, Maternal & Midwifery Nursing
6) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing

study in a field or theme of particular interest, improvement of ability in a special nursing field and motivation to learn more. More than 90% reported that these objectives were achieved.

- ・ Their present occupations are: 70% in education-related positions; 20% in clinical settings. They wish to continue in their fields.
- ・ Numbers of academic societies they were: master's, 4.9 ± 2.3 ; doctoral, 6.9 ± 3.9 . All had written at least one research paper as first author in the last five years (master's, 3.7 ± 3.1 (1~15); doctoral, 4.5 ± 3.3 (1~12)).
- ・ Graduates indicated their preferences for the future direction of this college in response to a set of questions that listed system, program and policy options for graduate education. 90% wanted more lectures and courses from nurses in clinical practice. Among many other suggestions, in decreasing order of frequency, were: admission for working people, day and evening courses, programs of study organized on a course basis.
- ・ Many patterns were seen as pathways from when they completed their basic nursing education to the future.

Our conclusions: The graduates have high expectations for the Graduate School. They, themselves, wish to actively develop in their careers throughout their lives. They want the Graduate School to take into account the diversity in ways of life of professional nurses and allow students flexibility in their courses of study. With respect to graduate education in nursing, the committee sees that in future the Graduate School should focus more on the cyclic relationship among nursing research, education and practice. The Graduate School can become a focal point for maintaining and improving each and the linkage among them, there-by promoting its social and professional relevance.

〔Key Words〕 St. Luke's College of Nursing Graduate School,

〔キーワード〕 聖路加看護大学大学院,

master's graduates and doctoral graduates, questionnaire,

大学院修了生, 動向調査,

educational system, pathways

大学院教育制度 人生航路

〔抄 録〕

大学院開設20周年を迎え、20年間の大学院修了生の動向から本大学院の特性を探り、これからの大学院の方向性や指針に資することを目的とした。

対象は、第1回修士修了生から2001年修了の全数278名、第1回博士課程修了生からの21名である。2001年7月に郵送による質問紙調査を行った。質問紙の構成は、①大学院入学の動機と達成度合、②看護職業人としての現在、③基礎教育からの将来への pathways、④制度を含む大学院への期待、⑤属性、などである。有効回収率：36.4% (104/286)。

その結果、

- ①修了生の約8割は、私的な進学で、職場復帰が保証された休職扱いや経済的な援助のある研修扱いは2割であった。

- ②進学の動機は、研究能力の向上・具体的な関心領域・テーマの追究・看護専門領域の能力の向上・学習意欲の高まりなどが上位で、修了時に、9割以上がいずれの動機も達成できていた。
- ③現在の仕事は、7割が教育関係、2割が臨床関係で、将来も就業継続を希望していた。
- ④所属する国内学会は、修士生：4.9±2.3，博士生：6.9±3.9，最近5年間の筆頭論文件数は、修士生：3.7±3.1（1～15），博士生：4.5±3.3（1～12）。
- ⑤大学院に必要な制度は、9割以上が実践スペシャリストの講師，次いで社会人入学制度，昼夜開講制，科目等履修制などである。
- ⑥基礎教育終了後から将来への人生行路（pathways）は、多様なパターンに分類された。

以上、修了生自らが、生涯にわたってキャリア形成を積極的に展開し、大学院での学習を選び、多様な生き方の広がりの中で、柔軟な学びやすい制度の導入を期待していた。大学院を中心とした看護プロフェッショナルな研究・教育・実践の連関レベルの維持と向上が、社会的な評価を定着させていくという循環的な関係を重視する大学院の方向性が示唆された。

I. はじめに

1920年に開学した本学は、1980年に大学院修士課程を開設し、1988年に博士課程を増設、2000年に大学創立80年、大学院開設20周年を迎えた。特に、大学院開設20周年を節目としてとらえ、歴史的な継承と未来に向けての創造を考えたいと願うメンバーが集まり、「大学院将来構想プロジェクト」が発足した。

現在、文部科学省においても高等教育改革の推進が重要課題であり、特に大学院の教育研究のあり方が質量ともに問われ、大学院の社会的役割と責任を踏まえた教育研究の高度化と個性化に向けて見直しと改革推進の方策が審議され、答申へと進んできている（中央教育審議会，2002）。

教育は、未来を創る営みであり、その成果には長期的視点が必要であろう。従って、本大学院が開設以来20年間に、どのような教育研究を行い、何を提供してきたのかの足跡の確認は、本大学院の評価のひとつであり、同時に、将来に向けて継承するもの創造するものを問うことであり、「大学院将来構想プロジェクト」の活動課題のひとつであった。

そこで、本調査は、この課題に資することを目的に、20年間の本大学院修了生を対象に修了生の動向からみた本大学院の特性を探ることに焦点をあてた。具体的には、教育を受けた当事者である修了生が何を求めて本大学院に入学し、何を学び、

修了後どのような社会的活動を送っているのか、さらにこれから先の生き方をどのように考えているのかを明らかにすることである。このことは、本大学院を評価することであり、確かな評価が、これからの大学院の研究教育の方向性や指針に大きく貢献するものにつながると考えている。

II. 対象と方法

対象は、1980年に開設された修士課程に入学した学生の第1回修了生から2001年3月までの修了生全数278名と、1992年の第1回博士課程修了生から2001年3月までに修了した21名である。

方法は、2001年7月に郵送による質問紙調査を行った。質問紙の構成は、①大学院入学の動機・目的と達成度合、②看護職業人としての現在（研究テーマ、学会・研究会所属と参加、著書・論文、仕事の満足、研究・教育・実践のバランス）、③基礎教育からの将来への pathways とライフイベント、④制度を含む大学院への期待・希望など自由記述、⑤属性などである。

回収は、修士修了生94名と博士修了生10名の計104名であり、住所不明などの返送を除く実質有効回収率は、36.4%（104/286）であった。なお、36.4%という回収率が、調査の目的である本大学院の特性を分析する数に値するかどうか問われた。そこで、手続きとして、母集団である全対象

者と回収対象者との間で、現在の仕事（教育・臨床・行政）と大学院専攻領域ごとの専攻分布を検討した。その結果は、ほぼ類似した分布であったので回収対象者を分析することにした。分析と集計は、修士課程と博士課程の目的の違いから、分けて行った。本文では、修士修了生を修士生、博士修了生を博士生とした。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の背景

分析対象者104名は、全員女性である。看護の基礎教育機関は、4年制大学が過半数を占め、残りは専門学校や短期大学である（表1）。調査時の年齢は、30歳代と40歳代が7割を占めているが、20歳代も60歳代にも分布していた（表2）。大学院の専攻領域は、表3のごとく、修士生が成人看護学（22.8%）、母性・助産看護学（19.5%）、地域看護学（16.3%）、精神看護学（15.2%）の順であり、1999年に開講された老年看護学専攻者も含む開講専攻領域を網羅していた。博士生は、母性・助産看護学、成人看護学・看護管理学などである（表3）。

2. 大学院進学の間緯と動機とその達成状況

1) 大学院進学と職場との関係

修士生・博士生ともに、約8割が私的な進学であり、休職扱いは修士生15名（15.9%）、博士生2名であり、ともに職場復帰が保証されていた。研修扱いは、修士生の5名（5.3%）であり、授業料あるいは生活費を職場から援助されていた（表4）。

2) 大学院進学の間緯・目的と修了時点の達成状況

大学院への進学の間緯は、11項目を提示し、該当する項目に間緯の順位の記入を依頼した。その結果を、第1位から第3位の占める割合で算出し表5に示した。修士生は、「研究能力の向上・獲得」19.6%、次いで「具体的な関心領域・テーマの追究」14.7%、「看護専門領域の能力の向上」13.9%、「学習意欲の高まり」13.2%が上位を占め、博士生も同様にこれら4項目が上位を占め、ついで

表1 看護の基礎教育

	修士	博士
専門学校	18 (19.1)	5 (50.0)
短期大学	18 (19.1)	
4年制大学	56 (59.7)	5 (50.0)
専門学校・4年制大	2 (2.1)	
計	94(100.0)	10(100.0%)

表2 現在の年齢

	修士	博士
～29歳	2 (2.2)	
30～39	37 (40.2)	2 (20.0)
40～49	33 (35.9)	5 (50.0)
50～59	17 (18.4)	3 (30.0)
60～	3 (3.3)	
計	92(100.0)	10(100.0%)

表3 大学院の専攻領域

	修士	博士
成人看護学	21 (22.8)	2 (20.0)
母性・助産看護学	18 (19.5)	3 (30.0)
地域看護学	15 (16.3)	1 (10.0)
精神看護学	14 (15.2)	1 (10.0)
小児看護学	7 (7.6)	
看護管理学	5 (5.4)	2 (20.0)
基礎看護学	3 (3.3)	
看護教育学	2 (2.2)	
老年看護学	1 (1.1)	
C N S	1 (1.1)	
地域・母性看護学	1 (1.1)	
看護学	3 (3.3)	
保健学	1 (1.1)	1 (10.0)
計	92(100.0)	10(100.0%)

※修士の中に、博士修了生の修士専攻も含む

表4 大学院入学に際しての職場との関係

	修士	博士
私的な進学	73 (77.7)	8 (80.0)
休職扱い	15 (15.9)	2 (20.0)
研修扱い	5 (5.3)	0
その他	1 (1.1)	0
計	94(100.0)	10(100.0%)

「学位の取得」10.0%であった（表5）。

進学の間緯の中で学習に関する9項目に対して、修了時点での達成状況を「よく達成」から「達成せず」の4段階尺度で回答を求めた。その結果、

表5 大学院入学の動機・目的の第1位～第3位の占める割合

項目	修士	博士
研究能力の向上・獲得	55 (19.6)	8 (26.7)
具体的な関心領域・テーマの追究	41 (14.7)	4 (13.3)
看護専門領域の能力の向上	39 (13.9)	6 (20.0)
学習意欲の高まり	37 (13.2)	4 (13.3)
物事のとらえ方、考え方の学習	24 (8.6)	2 (6.7)
専門職としてのアイデンティティの確立	19 (6.8)	2 (6.7)
看護観の再検討	18 (6.4)	0
学位取得	15 (5.4)	3 (10.0)
学習時間・学習環境の確保	13 (4.6)	0
他者からの勧め・影響	8 (2.9)	0
進学があったこと	7 (2.5)	1 (3.3)
その他	4 (1.4)	0
計	280(100.0)	30件(100.0%)

表6 修士時点での「よく達成」・「達成」の割合

項目	修士 n=94	博士 n=10
学位取得	91 (96.8)	10(100.0%)
学習意欲の高まり	90 (95.7)	10(100.0)
物事のとらえ方、考え方の学習	88 (93.6)	10(100.0)
学習時間、学習環境の確保	85 (90.4)	10(100.0)
専門職としてのアイデンティティの確立	85 (90.4)	10(100.0)
看護観の再検討	84 (89.4)	8(80.0)
具体的な関心領域・テーマの追究	84 (89.4)	10(100.0)
研究能力の向上・獲得	76 (80.9)	10(100.0)
看護専門領域の能力の向上	69 (73.4)	10(100.0)

「よく達成」と「達成」の回答を達成率として表6に示した。修士生は、9項目のうち7項目を9割以上の者が達成できたと答え、その内容は「学位の取得」・「学習意欲の高まり」・「物事のとらえ方、考え方の学習」・「学習時間、学習環境の確保」・「専門職としてのアイデンティティの確立」などであった。一方、博士生は、9項目のうち「看護観の再検討」を除いた8項目の達成率が100%と答えていた。

3. 現在（調査時点）の活動状況

1) 現在の仕事

現在の仕事を、教育と臨床、そして行政に分けて検討すると修士生と博士生ともに教育関係に従事しているものが7割を占め、臨床関係が2割であった（表7）。次に実践の学問である看護学は、どのような仕事の間であっても研究・教育・実践の活動が切り離せないものと考え、現在の仕事に

表7 修士生の現在の仕事

	修士 n=84	博士 n=10
教育	60 (71.4)	7 (70.0)
教授	18	3
助教授	13	3
講師	18	1
助手	11	
臨床	17 (20.2)	2 (20.0)
管理職	10	1
CNS	4	0
スタッフ	3	1
行政	5 (6.0)	
管理	5	
他	2 (2.4)	1 (10.0)
計	84(100.0)	10(100.0%)

表8 現在の研究と教育の実践エネルギー配分(n=92)

エネルギー割合	教育	実践	研究
100%	0	1	1
90%～	11	4	2
80%～	10	5	1
70%～	21	6	1
60%～	12	1	0
50%～	11	2	3
計	65	19	8

表9 現在の仕事の満足度

	修士	博士
大変満足	5 (5.7)	0
まあ満足	52 (59.8)	10(100.0)
あまり満足していない	28 (32.2)	0
不満足	2 (2.3)	0
計	87(100.0)	10(100.0%)

において研究と教育と実践のエネルギー配分をパーセントで求めた。その結果、現在の仕事において教育・実践・研究の占める割合が各50%以上である者、すなわち現在の仕事の中で半分以上のエネルギーを教育に当てている者が65 (70.7%)、次いで実践に当てている者19 (20.7%)、研究が8 (8.7%)であった（表8）。

なお、エネルギーのすべてを実践に、または研究に当てている者が、各1名いた。さらに、現在の仕事の満足については、「大変満足」から「不満足」の4段階で求めると、修士生は、大変満足：5、まあ満足：52 (59.8%)、あまり満足していない：28 (32.2%)、不満足：2であり、博士生は、

表10 学会・研究会への平均所属数

		修士	博士
所属学会	国内	4.9±2.3(1~12)	6.9±3.9(3~17)
	国外	1.4±0.7(1~3)	1.8±0.8(1~3)
研究会		1.8±1.1(1~7)	1.9±1.0(1~4)

表11 最近5年間の平均著述(著書・論文)件数

		修士	博士
著書		2.9±2.1(1~10)	3.4±2.3(1~8)
論文(筆頭)		3.7±3.1(1~15)	4.5±3.3(1~12)
総説		3.6±3.0(1~10)	6.0±6.4(1~15)

全員まあ満足と答えていた(表9)。

2) 現在の学術的活動

学会・研究会への平均所属数は、表10のごとく修士生が、国内学会：4.9±2.3(1~12)、研究会：1.8±1.1(1~7)、博士生は、国内学会：6.9±3.9(3~17)、研究会：1.9±1.0(1~4)であった。また、学会へ参加度合いを1年1回以上・2年に1回・3~5年に1回の3つから求めると、全体の9割以上が1年に1回以上と答えていた。そして、1年に1回以上学会に参加していて、学会で発表している者は、修士生：62.2%(51/82)、博士生：80.0%(8/10)であった。

次に最近5年間の学術雑誌での発表論文と著書についての平均件数は、修士生：著書2.9±2.1(1~10)、筆頭論文：3.7±3.1(1~15)、総説：3.6±3.0(1~10)であり、博士生は、著書：3.4±2.3(1~8)、筆頭論文：4.5±3.3(1~12)、総説：6.0±6.4(1~15)であり、修士生・博士生ともにどの著述にも個人差が見られた(表11)。また、最近1年間に臨床実践での活動状況は、表12のごとくであり、修士生と博士生ともに約半数の者が臨床実践での研究指導と継続教育プログラムの企画と運営にたずさわっていた。そして、臨床実践での研究指導の件数を、1テーマを1件とするとその平均件数は、修士生：6.6±8.5(1~50)、博士生：5.8±4.8(2~15)であり、継続教育プログラムの企画・運営は、修士生：3.1±3.7(1~17)、博士生：2.2±1.2(1~4)であった。

4. 大学院への新しい制度への必要性

大学院の特長を高めていくために必要とする新

表12 最近1年間の実践での活動をした人の割合

活動内容	修士 n=92	博士 n=10
実践での研究指導	52(56.5%)	5(50.0)
継続教育プログラムの企画・運営	38(41.3)	5(50.0)
コンサルテーション	25(27.2)	2
患者教育プログラムの企画・運営	16(17.4)	1

表13 新しい制度が「是非必要」・「必要」の割合

新しい制度	修士 n=89	博士 n=10
実践スペシャリストの講師	94.2	90.0%
社会人入学制度	88.0	80.0
セメスター制	85.2	70.0
科目等履修生制	76.6	77.7
昼夜開講制度	73.4	77.7
マルチメディア通信制	70.5	60.0
パートタイム制	70.1	80.0

しい制度として、社会人入学制度・昼夜開講制・科目等履修制・パートタイム制・セメスター制・実践スペシャリストの講師(臨床教授制)・マルチメディア利用の通信制の7つの制度を設定し、「是非必要」から「必要ない」の4段階で回答を求めた。その結果、修士生・博士生共に9割以上が実践スペシャリストの講師(臨床教授制)を必要とし、次いで社会人入学制度、昼夜開講制、科目等履修制と続いている。修士生ではセメスター制が、博士生ではパートタイム制がやや多いが、7つのどの制度にも7割以上が「是非必要・必要」と答えていた(表13)

5. 看護基礎教育終了後から大学院、現在、そして将来への Pathways

青年期の看護基礎教育の段階から専門的職業人としての教育を受け、国家資格を生かした就業生活を生涯にわたって継続していく個人の人生行路(Pathways)の視点から、大学院修士課程・博士課程の学びの時は、どの辺の道すじにあるのかを明らかにするために、社会の多くの人々が、年齢的に共通に経験する結婚・出産などの出来事とも関係させながら検討をした。

1) 基礎教育終了後から現在までの Pathways

修士生は、基礎教育終了後に就業し、その後大学院に進学し、修了後就業を続け現在に至っていた。個人ごとに詳細に検討すると、図1のごとく

群	パターン	Pathways	人 (%)
継続 (仕事)	1	仕事 → 修士 → 仕事	42 (47.7%)
	2	仕事 → 修士 → 仕事 結婚 出産	(12) 33 (37.5%)
	3	仕事 → 修士 → 仕事 出産	(7)
	4	仕事 → 修士 → 仕事 結婚	(6)
	5	仕事 → 修士 → 仕事 結婚 出産	(5)
	6	仕事 → 修士 → 仕事 結婚 出産	(3)
中断 (仕事)	7	仕事 仕事 → 修士 → 仕事 結婚 出産	(6) 13 (14.8%)
	8	仕事 仕事 → 修士 → 仕事 結婚	
	9	仕事 → 修士 → 仕事 仕事 結婚 出産	
	0	仕事 仕事 → 修士 → 仕事	
	1	仕事 → 修士 → 仕事	
計			88 (100.0%)

図1 基礎教育終了後から現在までの Pathways
—修士修了生—

群	パターン	Pathways	人
継続 (仕事)	1	仕事 → 修士 → 仕事 → 博士 → 仕事	5
	2	仕事 → 修士・博士 → 仕事	1
	3	修士 → 仕事 → 博士 → 仕事	1
	4	仕事 → 修士 → 仕事 → 博士 結婚 →	1
	5	仕事 → 修士 → 仕事 → 博士 → 仕事 結婚 →	1
	6	仕事 → 修士 → 仕事 → 博士 → 仕事 結婚 → 出産 →	1
計			10

図2 基礎教育終了後から現在までの Pathways
—博士修了生—

現在まで就業を継続している者は、75 (85.2%)で、残りの13 (14.8%) は、どこかの道すじで一時就業を中断していた。そして、就業継続群の Pathways は、6 パターンに分類され、第1パターン：仕事→修士→仕事が42 (47.7%) と一番多く、次いで第2・3・4・5・6パターンのごとく仕事→修士→仕事であるが、その道すじのどこかで結婚あるいは出産の経験をしている者は、33 (37.5%) であった。就業中断群は、5つのパターンに分類され、就業中断の時期は、大学院進学の前のも、大学院修了後に中断する者もいた。就

業中断群の中で、就業後、結婚出産で就業を中断し、復職して大学院に進学し、修了後就業して現在に至る第7パターンが6と多かった。

同様に博士生を検討すると、全員が仕事継続群であり、パターンは、6つに分類された(図2)。第1パターンは、仕事→修士→仕事→博士→仕事という Pathways で、半数の5名に共通するパターンであり、このパターンに結婚あるいは出産がどこかの道すじに入ったパターンが第4・5・6のパターンである。

2) 基礎教育終了後から現在、そして将来への

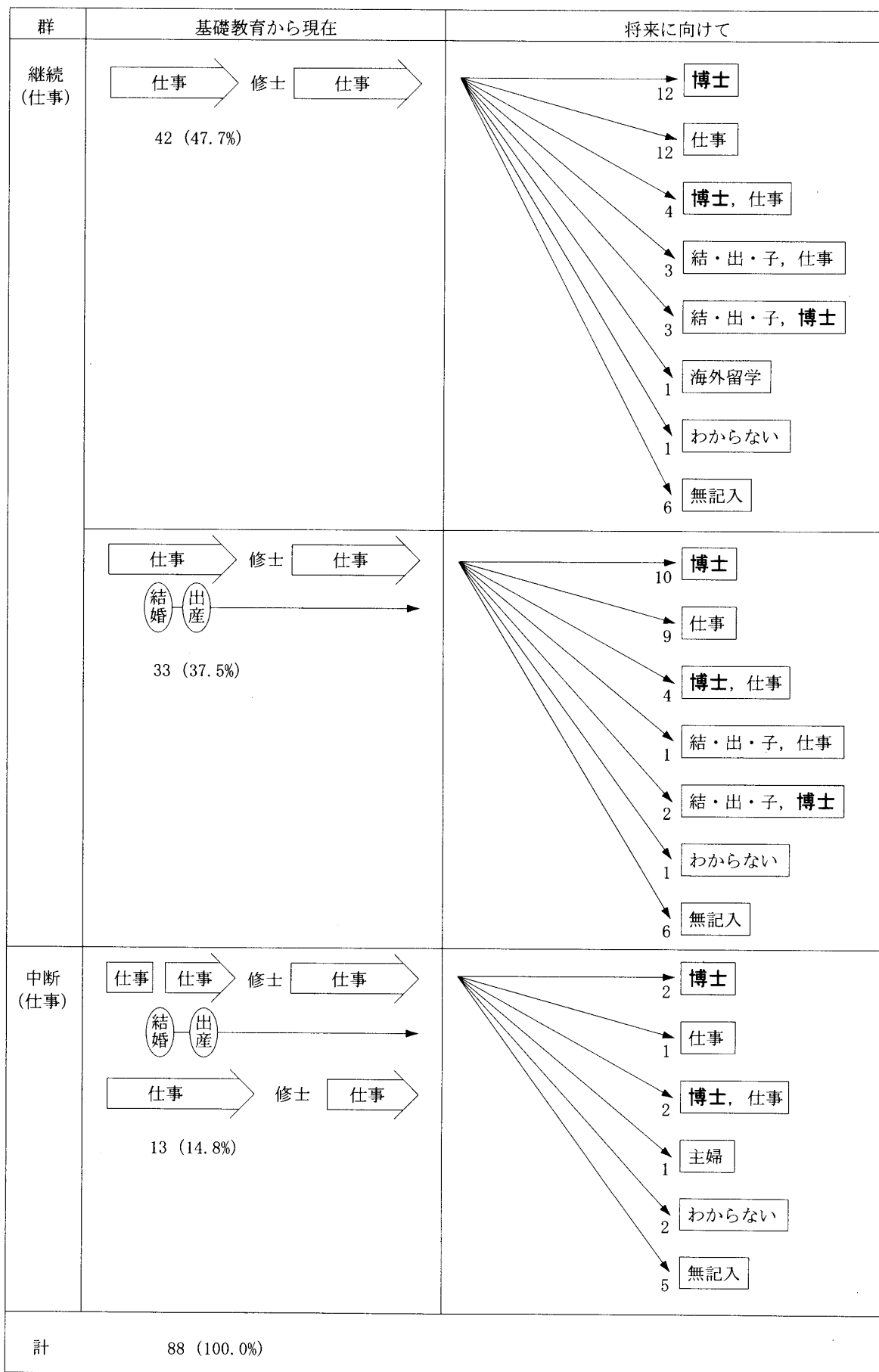


図3 基礎教育から現在そして将来への Pathways
—修士修了生—

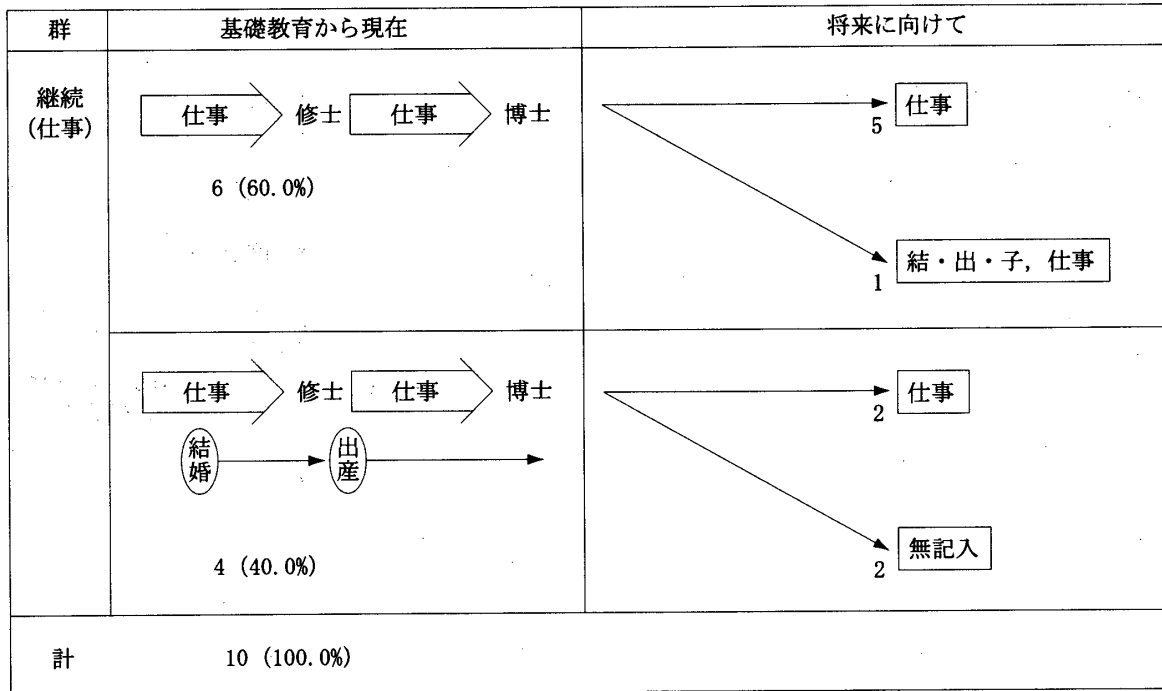


図4 基礎教育から現在そして将来への Pathways
—博士修了生—

Pathways

修士生の就業継続群75は、現在までに結婚あるいは出産を経験しない者(42)と、した者(33名)に分かれるが、両者共に、将来に向けて博士課程への進学を予定している者が46.7%(35/75)と約半数を占めていた。その中には、博士課程進学、博士課程進学と仕事、結婚出産と博士課程などを予定していた(図3)。また、就業中断群の13のうち4は、博士課程進学を予定していた。

博士生10名は、結婚や出産の経験有り無しにかかわらず現在まで仕事を継続してきており、将来も仕事を継続すると答えた者が8で無記入が2であった(図4)。

IV. 考察

1. 修了生から見た大学院教育

修士・博士の修了生の約8割が、私的な進学であり、職場復帰が保証された休職扱いや経済的な援助のある研修扱いは2割であった。進学の動機の上位は、研究能力の向上・具体的な関心領域・テーマの追究・看護専門領域の能力の向上・学習意欲の高まりなどであった。この結果は、聖路加

看護大学学部卒業生の大学院進学に関する動向調査の動機内容と類似するものであった(香春他1992)。修了時には、9割以上の者がこれら進学動機のいずれの項目も達成できたと答えていた。この背景に、修士課程の入学者は、看護職経験者であり、関心あるテーマと高い学習意欲をもっていること、そして、多様なキャリアの院生構成が主体的な研究を支える教育環境になっていることが推察できる。しかし、修士の場合は、入学後は学業に専念することを条件とし、退職をして進学するため学費や生活費の問題が課題のひとつでもある。

現在の仕事は、修了生の7割が教育関係に従事し、2割が臨床関係であった。これは、看護系大学の急増の実情を反映しているといえる。言い換えれば修了生が看護教育の大学化に貢献しているともいえよう。また、修了生は、教育・臨床・行政の場で就業を継続し、将来にわたっても就業を続けていく意識をもっている集団である。大学院が社会に果たす役割を示す指標のひとつとして、就業継続をとりあげれば、本大学院修了生は受けた教育を社会に還元していると評価される。しかし、看護学を専攻する者は個人においても、研究・

教育・実践の活動が切り離されないものとする。修了生は、現在の仕事の中で半分以上のエネルギーを教育に当てている者が7割で、研究は1割以下であった。修了生が、看護職業人として、教育や臨床、行政のどの場においても、研究・教育・実践のエネルギー配分のバランスを考え、実行していける個人側の意識と組織側の環境のあり様が、今後の看護学の発展に重要な影響をもたらすと考える。

2. これからの大学院への期待

基礎教育終了後から現在、そして将来への人生行路 (pathways) は、多様なパターンに分類され、結婚や出産を体験しながら研究を続けている者は、46名 (46.9%, 46/98) であった。個人自らが、生涯にわたってキャリア形成を積極的に展開し、大学院での学習を展開してきた様相が示された。そして、本大学院の特長を高めていくために必要な制度として、9割以上の者が実践スペシャリストの講師 (臨床教授制) の必要を第1番にあげ、ついで、社会人入学制度・ Semester制・科目等履修制・昼夜開講制・マルチメディア利用の通信制・パートタイム制を必要であるとしていた。看護職者の多様な生き方の広がりの中で、柔軟な学びやすい制度の導入が修了生から期待されているといえる。

現在、仕事と学習を両立させ自分の生き方のペースにあった学びを支援する社会人入学制度は、大学院設置基準の制度の見直しの弾力化に伴い、本学では博士課程が2002年度入学生より実施された。修士課程は現在検討中である。今後、大学院は、従来の研究者養成と、社会の需要に応じる質の高いケアを提供する高度専門職業人の養成、そして生涯学習として看護職者が持つ目標に応じられる再学習機能のある教育の拡充発展が望まれる。

そして、自宅や職場からの地理的・時間的な制約に対しては、情報通信技術を積極的に活用する通信制や e-learning などの方法の工夫、さらに博士課程修了生や修士修了生への将来へ向けてのニーズとして、ポスト博士を含む修了生対策にも力を入れることが期待されている。

大学院を中心とした看護プロフェッショナルな研究・教育・実践の連関のレベルの維持と向上が、社会的評価を定着させていくという循環的な関係を重視する大学院のあり方が今後の方向性であり、そのための具現化の促進が急務な課題である。

V. おわりに

2000年は、大学院開設20周年であり、歴史的な継承と未来に向けての創造を考えていく時であった。そこで大学院の将来構想に関心のあるメンバーが集まり、「大学院将来構想プロジェクト」が発足した。その活動のひとつが本調査であり、20年間に本大学院で教育を受けた修士修了生と博士修了生の動向に焦点をあて、本大学院の特性を明らかにすることを目的とした。

修了生は、大学院進学が明瞭で、修了時にはその動機が達成され、修了後教育関係の就業が多く、教育・研究・実践に取り組みながら生涯にわたって看護職としてのキャリア形成を続けていた。修了生個々の pathways は、多様なパターンとして示された。この多様な生き方の広がりの中で、柔軟な学びやすい制度の導入が期待され、社会の需要に応じる質の高いケアを提供できる高度専門職業人の育成と、ポストドクターへの対策が本大学院の方向性として示された。

調査にご協力くださいました修了生の方々に感謝し、ますますのご活躍を願っています。

文 献

- 1) 大学院開設20周年記念行事実行委員会編. 聖路加看護大学大学院開設20周年記念誌 2001
- 2) 中央教育審議会. 大学の質の保証にかかわる新たなシステムの構築について・大学院における高度専門職業人養成について・法科大学院の設置基準等について (答申) 2002
- 3) 香春知永, 横山美樹. 聖路加看護大学学部卒業生の大学院進学に関する動向調査. 聖路加看護大学紀要. 21, 1995, 50-56
- 4) 御茶ノ水女子大学. 卒業生・修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結

果報告書 2001

5) 常葉恵子他. 聖路加看護大学大学院の現在:

日本の看護系大学院①. *Quality Nursing* 6(1)

2000, 4-64